

淡い初恋（古い手帳に残る短歌九首）

・オハヨーと声かけ過ぎる自転車を心待ちする駅までの道

汽車通学だった私は家から駅までの道を歩いていました。時折通り過ぎる学生服の少年の事が気にかかる私でした。

・通学路に朝の挨拶交わすため木陰に吾れを待ちいし君か

歩いていると何処かで待っていたのか後ろから近づいて挨拶をしてくれる人がいました。それは私が気になっていた学生服の少年でした。

・人恋うる詩の一篇を書きし文赤き手袋の手に渡されき

何日か過ぎた或る日その少年はそつと手紙を渡してくれました。

戸惑い乍ら手袋のまま受け取りました。赤い毛糸の手袋が懐かしい。

・背は高く学生服の写真は今も私のアルバムに笑む

手紙の中には学生服姿の写真が入っていました。誰にも言えず机の引出しの奥にしまって置きました。かすかなときめきを抱きながら。

・唯一つ母に隠せし事のあり君を見舞いし浜の病院

少年は胸の病で入院。お見舞いに一人で行きました。海からの涼しい風の入る窓辺に二人は言葉も少なく向き合ったまま暫くの時が過

ぎました。帰る時今日はありがとうと優しく言ってくれました。元
気になってまた逢いましょうとも。別れる時私は小さな人形を残し
て帰りました。きつと良くなる事を祈り乍ら。

・君の名を幾たび紙に書いている私の心語れぬままに
一人で思うばかりどうする事も出来ずそのまま月日は過ぎてゆきました。

・憧れに留めし想い香き日よ淡き思い出のみぞ愛しも
随分の月日が過ぎました。胸を病むと言う彼は療養に励ん居ると
聞いていました。あの日少しやつれて見えた顔が気になっていました。
もう一度お目にかかりたいと思いながら。

・黒枠に君の名ありて寒い朝過ぎし事ども目裏に顯つ
新聞の黒枠に彼の名前を見た時は本当には驚きました。やはり快復
されなかったのです。あの日もっとお話すれば良かったと思ひ乍ら
も私の心に終止符が打たれました。

・幾十年過ぎて時折夢に見る逝きたる人の面影優し
七十年過ぎた今、古い手帳に残るおかしな短歌らしきものを読み返
し乍ら暫し若き日に思いを寄せるひと時でした。淡く、愛しい、
そして偲なく終わった私の初恋。